

含まれ、塩類の沈着は認めなかつた。これ等は今迄の他の研究の結果と一致している。

ヌマガエル (*Rana limnocharis*) の間性 吉倉眞(熊本大・教育)

熊本産ヌマガエル雄の性腺分化に 2 型ある。1 は発生當初から分化の明瞭な正常型で、他は分化途上、精原細胞のあるものが精巢卵に発達し、それ等は早晚退化するにしても幼期間性的性腺を形成する雄間性型である(兩型の比はほぼ 1:1)。精巢卵の発生は性細胞兩性能の發現とみられ、その退化は或種化學物質の生長阻害によるらしい。次に偶発的雌間性 1 個(體長 38mm)を得た。左性腺は正常卵巢、右性腺は卵巢精巢で、後者の外縁は卵巢、よく発達せる卵細胞を有し、内縁は精巢、正常精子を形成していた。兩部接する所の卵細胞は退化中である。ここでも卵細胞の生長阻害、精巢組織の発達促進物質の存在を想わしめる。ここに卵巢精巢側の間腎が異常肥大し、中腎前方に小突起を形成するのを認めた。發生的に性腺の髓層は間腎と起原を同じうし、また副腎皮質ホルモンの性腺分化に及ぼす影響が論ぜられている時興味ある現象と考えられる。

(問) 種々の間性のできるのは、卵の過熟によるのではないか。(武藤義信)

(答) この場合ことごとく卵の過熟によるものとは考えられないが、今後調査してみたい。

血球凝固と赤血球 千島喜久男(岐阜大・農)

従來の血液凝固學説は fibrin 析出の化學を主とした傾が濃い。従つて血球の行動的側面では 70 年前の Bizzozero 時代と大差ない現状である。私は赤血球の行動を主體として各種脊椎動物に就き研究した結果、血液凝固の主要因は fibrin の析出よりは寧ろ血赤球の凝集、viscous metamorphosis、或は破壊等による塊狀化及血漿の gel 化が主要因で fibrin 形成は二義的であり、特に鳥類以下では fibrin 形成は血液凝固に必ずしも不可缺ではないと云う説を得た。其他従來 fibrin の析出、血小板の破壊、凝集等と考えられて居る現象は血赤球の行動と直接的な關係のあることを知つた。

(問) 生體觀察の場合にも血漿はカバー・ガラス面にフィブリン糸を間もなく形成する。それに赤血球が附着することがあるが、赤血球が自己の移動力によつて集合するということはいふことが出来ない。(佐藤磐根)

(答) 生體觀察(私の材料とした脊椎動物)では云われる如き fibrin net は私は認め得なかつた。カエルに於て赤血球が凝固中心へ移動するのは fibrin 様物質の收縮による他動的なものである。

内部寄生虫類組織における螢光物質の存在について(豫報) 山尾泰正(千葉大・東京大)

豚及び馬蛔虫の消化管、精巢、卵巢、子宮、體壁、體液の各部をメタノールで抽出した試料中に、paper chromatography によつて、數種の螢光物質を認めた。このうち黄色の螢光を出す物質が flavin の Rf 及び色調との比較、光の照射によつて lumi-flavin の Rf を示すようになる等の點から、flavin であることを確認した。これは中腸、精巢、體壁、體液中に認められる。なお中腸の flavin は腸管内容物としてではなく、腸壁の組織内に存在していることも確められた。この外雞蛔虫、ゴイサギの胃内に寄生していた圓虫類の一種並びに量的にごく僅かであるが牛の肝蛭の抽出液中にも認められる。なお總ビタミン B₂ 量を與えるという八木、石黒の温湯浸出法によつて馬と豚の蛔虫の中腸を處理し、浸出液の paper chromatograph によつて、中腸組織内に遊離の flavin, flavin mononucleotide, flavin adenine dinucleotide の存在を確かめることができた。

胚發生機構の組織化學的並に免疫化學的解析 井上和子(金澤大・醫;金澤女子短大)

兩棲類初期胚の發生に伴う生化學物質の分布狀態を組織化學的に檢索した。即ち、*Rhacophorus*, *Hynobius*, *Triturus*, *Bufo* 等を材料とし、次の物質について檢討した。tyrosine, tryptophan, SS-SH, arginine, histidine, basic amino acids, glycogen, glycoprotein, lecithin, ketosteroids, fatty acids, RNA, DNA, alkaline phosphatase, neutral phosphatase, acid phosphatase, lipase, phenol sulfatase, Ca, Mg, Fe, 等で、